広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	家庭教育における親の倫理的役割 : 日本と中国における道徳教育観の比較を通して
Author(s)	趙, 月
Citation	HABITUS , 26 : 192 - 208
Issue Date	2022-03-20
DOI	
Self DOI	10.15027/52161
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00052161
Right	
Relation	

家庭教育における親の倫理的役割
――日本と中国における道徳教育観の比較を通して――

趙　　月

（広島大学大学院文学研究科博士課程前期 2 年）

はじめに

徳育と知育と体育は子どもの成長にとって重要であり、教育においてこれらは全て不可欠な要素である。しかし、時代の発展に伴って学校教育におけるそれらの比重は変化してきた。とりわけ、近代以降、子どもの知育は速いスピードで発展していく一方、感情や意志や身体の教育はおざなりにされ、道徳教育も知的に進められることになった。そこに、子どもに関する心身の問題や道徳的な問題が発生することになる。本論文は最も道徳教育の基盤を作り、青少年問題の根源ともなっている今日の家庭教育に焦点を当てて考察を進めたい。家庭教育において親が担う「模範、教師、相談役」という三つの役割を考察の軸とし、よりよい親のあり方を追求していきたい。

第一節　模範として

日中両国に「親は子どもの鏡だ」という言い方がある。子どもが成長する過程では、周りの人をマネして行動するので、身近な親の言語と行動が第一に、しかも大きく子どもに影響をもたらすのである。

井上肇は「家庭での養育や教育は、学校教育のように形態を整え、カリキュラムを立てて意図的に行われるものとは違います。それは見まねで身に付けていくような無意図的なものです。極論しますと、親の生きざまを子どもが模倣

して成長するということです」[1)]と述べ、親の無意図的な行為が子どもに影響することを指摘する。また、原野広太郎も以下のように子どもの価値観への影響を指摘している。

> 子どもの中に価値観が作られるのは、第一次的には、家庭とマス・コミと同輩集団を通してである。家庭においては基本的な社会化が行なわれるが、その過程において、親は意識すると否とに関わりなく、一定の価値観を子どもに伝えることになる。というより、親のもっている価値観が、親の知らない間に子どもによって、学びとられる、といった方が正しいであろう。[2)]

以上のように、子どもは親の言語や行為をマネするだけではなく、価値観についても影響を受ける。

また、原野は子どもが社会規範や行動基準を学んでいくルートとして三つ挙げる。一つは知識として教え込まれるルートで、これには学校教育も加担する。二つ目は家庭で「しつけ」として直接、体験的に訓練されるルートであるが、最も影響力が大きいとされるのは三つ目のルートの、身近な両親の実像をモデルとして学んでいくものである[3)]。身近なモデルとしての親の言葉や行動は子どもの心に強く残される。しかし、このように身近な親をモデルとして規範を身につける際に、親の言行が一致しない場合子どもは親の言葉ではなく、親の行動から学ぶのである。原野はそのことを以下のように指摘する。

> 叱ったり説教したりして、どんなにきびしく子どもの行動を規制しても、親自身が子どもの眼の前で、だらしない生活、いい加減な態度、たてまえと背反した夫婦間の言葉のやりとりを見せつけているなら、

子どもはとかくたてまえよりも、親の本音の部分に強い関心を持ち、それを人格に取り入れていくものである。[4)]

世の中には、口だけで、自分は子どもに教えた通りに振る舞わない、言行が一致しない親も多いだろう。いかに言葉で一生懸命に指導しようとしても、親自身がしないことを無理に子どもにやらせるなら、子どもにとってなんの印象も残らない。むしろ、「親は嘘つきだ」と感じ、親への信頼感も失ってしまう。

親にとってはまず、子どもにマネされるということを意識すること、すなわち、子どもの視線を意識することが肝心だと思われる。「手を洗うこと」のような生活習慣にせよ、「誠実・謙虚」などの道徳教育にせよ、親自身が立派にできれば、子どもは「親のような人になりたい」という気持ちが自ら発生してくる。張光泽は親が身を以って道徳を示すことで子どもの心の共鳴を喚起させることができると述べ、こうした「模範」を道徳教育の問題の解決策として挙げている[5)]。言葉で強制的に子どもに何かをさせるより、子どもが親の姿を見ながら、自ら行動できるようにすることが親の真の役割である。

もう一つ問題になるのは、親の自信のなさである[6)]。原野広太郎は、激しく変化している現代では、問題を起こす子どもの親には二つのタイプがあると論じた。一つのタイプは時代の変化を無視して古い基準を子どもに押しつける親であり、もう一つのタイプは、自分の考え方が子どもの世代に通用しないと決めつけ、放任する親である[7)]。この二つタイプの親になる原因について原野は以下のように指摘する。

いずれにしても、このような（筆者註：古い教育理念を持ち込む親と放任する親が行った）家庭教育の失敗は、親の権威低下の問題につながっている。親が自分たちが生きてきた生き方に自信を持ち、また

そのような自信は持てる暮らし方を日常送っているかどうかが問題なのである。親がどんなに立派に子供を育てようと思っても、本質的に自分に欠けているものを子どもに伝えることはできないのである。子どもが親の言うことにたかをくくる場合、親は自らの生活態度を省みる必要がある。[8)]

古い教育理念を持ち込む親にせよ、放任する親にせよ、どちらも実は、子どもにとって最善の教育方法を把握できず、「親」としての自信を失い、子どもをしつけできるかどうかや自分の生き方に自信を持たないのである。自信のない親は激動の変化に向き合う時、変化に応じるのではなく、従来のやり方に固執したり、教育の義務から逃避したりするのである。これを避けるには、今までの生活態度を反省し、親としての自信を取り戻す必要がある[9)]。

自信を確立するには、原野の言う「省みる」ことが重要な手がかりとなる。自分の長所と短所を把握して、出来ることに誇りを持ち、出来ないことを受け入れ、正直に完璧ではない自分を認める。このようにして、自分と和解すると、自信が少しずつ出てくるのではないだろうか。

もう一つ親の自信につながるのは、「社会人」として活躍している自分を発信することである。上寺久雄は「親・人間・職業人」という三つの身分を統一する「三位一体」を提唱した。上寺は「仕事への自信が、家庭生活にも自信を生み、家庭生活が健全ならば、親として生きつづけうるならば、仕事へも身がはいるということは事実でありましょう」[10)]と述べ、仕事の領域と家庭の領域には自信で繋がっていることを指摘する。筆者としては、加えて、仕事だけではなく、自分の趣味等においても自慢出来ることがあれば、自信を増すことに役立つのではないかと考える。

自信に満ちた親の姿を見る子どもは自然に親を尊敬するようになる。いつか

親のようにすばらしい人間になれるようにと思うことができれば、子どもは自らの意欲で発展していく。従って、親は子どもに模範を示し、伸ばす方向を示すべきである。

さらに、反省は、子どもにとって良いだけではなく、親自身も成長していくチャンスである。井上肇は「子どもを育てることは親自身の人生にとってかけがえのない一つの重要な営みなのです。(中略)親は子供を育てることによって、自分の過去の半生を追体験することができ、これからの人生を、より人間らしく充実したものとして生きることができるからです」[11)]と、親の反省によって親子ともに成長することを指摘する。忙しい生活を送る人にとっては、今までの人生を振り返ることは少ないだろう。しかし、家庭教育においては、子どもの姿を観察する際、親は自分の小さな頃のことや今までに経験したことを思い出すことがある。このように家庭教育は親にとっても反省して未来を企画できるいい機会である。

以上、親の言葉や行動が子どもに強い影響を与えるので、親は子どもの視線を意識するうえで、子どもに模範のあり方を示すべきだということを明らかにした。

第二節　教師として

時代の発展につれて、日中両国では核家族化が一層進んでいる。子どもは国にとっても、家庭にとっても宝物のような存在である。子どもは親や祖父母たちからの愛情に囲まれて育つ。しかし、両親や祖父母の溺愛によって、自分のことを第一におく自己中心の子どもが増えている。このような「しつけの甘さ」に起因する問題が浮上してきている。この問題について、原野広太郎は以下のように、理屈を欠いたしつけによるものだと述べた。

家庭のしつけの甘さというのは、しつけが欠けていることをよりも、（中略）理屈ぬきのおしつけ的しつけが横行している点にあるのではないか。親たち自身に、自分の生活様式や生活習慣を対象化し、それらの意味を考察するという態度がない。従来のしきたりをイージーに受け入れ、世間並みにやることで安心感をおぼえるような生き方をしている。合理的·主体的な生き方をしていないのである。こういう親がしつけにきびしく、子どもをステロタイプ化するのであれば、これは甘いしつけなのではないか。[12)]

子ども一人ひとりは自分の個性を持つ。もし親がただ一般的に認められたしきたりを子どもに押しつけるなら、それは子どもの個性を無視する可能性が高い。従来のしきたりに従って、深く思索する必要がないしつけのやり方は親にとっては楽なやり方である。その意味では、甘いしつけだと言えるだろう。親が子どもをしつける際、考察が不足していたり、方法論が把握されていなかったりすると、単純な固定的なやり方で行うのでは効果が出ないだろう。そのため、物事を知らない子どもにとって、親はただ振る舞い方を教えるだけではなく、教師のように、背後の理屈も踏まえて教える方がもっと効果的であり、子どもの心に残されるであろう。

教師は子どもに知識を覚えさせるために、その知識に関する原理・やり方を把握し、その原理の説明を通して子どもの理解を高める。そして、繰り返し練習させることによって子どもがその知識を習得できるようになるのである。親が子どもをしつける際は、ただ振る舞い方を教えても、子どもはわからないことが多いだろう。たとえば、電車やバスで静かにするといったようなことを単に子どもに教えたのでは、なぜだめなのかという疑問が出てくる。一方で、「仕事で疲れている人に休憩できる空間を作るため」や、「大声で他人に迷惑をかけ

てしまうのは良くないため」などの根拠も子どもに丁寧に説明できたら、子どもは受け取りやすくなるのではないか。根拠を理解しないままで親の言う通りにしても、教えられたことを忘れてしまう可能性もある。

そして、親は教師のように、子どもに練習の機会を作り、子どもの経験を豊かにする必要がある。子どもは物事について、実際にやってみた上で、経験として覚えるものである。青木誠四郎は子どもの経験を豊かにする方式について、「遊ぶ子ども・試みる子ども」と「家の仕事と子ども」を指摘する[13)]。

まず、遊ぶ子どもは、遊びで歩いたり走ったりすることを通して、体を動かす子どもである。ここにおいて子どもは、仲間と一緒に遊ぶ間に、協力することを通し、社会的な生活のしかたを学ぶ[14)]。次に、試みる子どもは、知らない物事を聞いたり、やってみたりする好奇心から行動する子どもである。彼は試みることによって、知識や経験を手に入れるのである[15)]。最後に、家庭という社会の生活のモデルでは、親や家族の手伝いを通して、一般的な生活常識を学ぶだけではなく、家庭の一員としての責任を感じるのである[16)]。子どもは以上のように、遊び・試み・手伝いの経験から学ぶのである。こうした多様な経験は子どもの才能の発見にもつながる[17)]。それゆえに、子どもの教育には、経験が重い役割を持つ。できるだけ子どもに多くの経験をさせることが大切なのである[18)]。

また、親は親の視点から離れて教師としての視線で子どもをみる必要がある。なぜかというと、「子どもを客観的に見ることによって初めて、子どもの様子や長所、そして欠点も見えてくる」[19)]からである。親は他人からすぐわかる子どもの欠点も、ずっと親のメガネをかけたままでは何も見えないのであろう。

そのためには、親はまず、教師のように「きびしさ」を表現する必要がある。その時は「強制」の意識を持つことが大事である。原野広太郎は以下のように述べる。

一般に「しつけ」がないといわれるのは、日常の言葉遣いや動作についての節度、善悪のけじめ、および勉強の取り組みや仕事の手伝いの三つの面に関してである。これら三つの面では、それぞれに子どもが社会人として成長していくうえでの準備条件であって、しかも、子供の成長発達とともに自然に身に備わっていくたぐいのものではなく、学習の結果として身につけていくものなのである。したがって、学習を必要とする以上、子どもの任意や自発性に委せるだけでは不十分であり、基本的には強制を絶対とし、そこにある程度の「きびしさ」が求められるわけなのである。[20)]

親の「きびしさ」は子どもにとっては、子どもを車に乗せるときに使うジュニアシートのようなものである。つまり、子どもの安全を守るために使われるものである。注意すべきことをちゃんと注意しなければ、それは子どもにとってはやってもいいことになる。それはいざというとき大変な事態をもたらす可能性がある。道徳教育では、例えば、子どもが嘘をついたと気づいたら、そのことを言わないと、子どもに嘘をついても大丈夫だという感覚を生じさせ、またいつか嘘をつくようになる可能性がある。したがって、子どもが真の成長に至る過程では、親は教師のように、そばで正しく指導して、間違ったところを指摘することが大事である。さらに、親のきびしさについて、上寺久雄は親子の相互の働きあいできまる「ワク」をつくることを提唱する。ワク内での子どもの欲求にこたえることが親の任務である[21)]。

親が子どもの教育を行うにあたり、避けるべきことがある。それは教育上の知見を盲目的に信じ、それを考えずに子どもに押しつけることである[22)]。上寺久雄はこれについて「知ったことをなまで子供に投げかけたり、自分の問題に

ほりさげることなく、教えられたとおりにやろうとして無理をするところをやる」と批判し、自分の外から知ったことを生かすために反省的思考をすることを勧めている[23]。また、教育はその対象によって同じ教育方式も異なる効果が出てくるので、目の前の子どもの個性をよく考えたうえで行動すべきである。

以上のように、子どもを育てる際には、親は固定的なやり方ではなく、教師のように、子どもにもっと理解しやすい方法で教えることが肝心である。また言葉で説教するより、実際に子どもをやらせることを通して経験を豊かにさせるべきである。そして、子どもが成長する際には、親のきびしさも不可欠なものである。

第三節　相談役として

親子関係は特別な人間関係である。親は自分の子どもの顔や性格を選べない。同様に、子どもも生まれる家庭を選択できない。井上肇は親子関係がまったく選択肢の余地のない宿命的な人間関係だと評価する[24]。

友達とか夫婦とかの人間関係と比べるなら、親子関係は親子一体の親密な関係から次第に分離していく関係である。夫婦はもともとあかの他人であるが、結婚して一つの家を作ることを通して夫婦一体になる。しかし、子どもは小さい頃は、親に守られ、親から離れない状態であるが、子どもが大きくなると、独立の一人として生きていくのである。子どもにとって、親との分離は避けられないことであり、成長には不可欠なことである。

ここで問題となるのは、子どもに対するコントロールが強すぎる親である。まだ頭脳が発達していない子どもに対して、子どもの考えを無視し、無理矢理に自分の考えを押し付ける親がいる。まだ自己意識が発達しない子どもにとっては、それは親に人権を奪われる恐ろしいことである。原野広太郎は以下のように述べる。

どこの家庭にもその家庭だけの独特の雰囲気がある。(中略) その家庭だけの雰囲気のあることを認めるならば、そこで育つ子どもは、本来的に個性あふれたれた存在者なのだ。ということを知る必要がある。もし逆に、あらかじめ一つのヒト型を作り、どの子どもも同じ型にはめるためには、家庭で父と母が子どもをこのようにしつけるべきだと、科学の立場で指導者が指示したならば、子どもは望んだとおりの人物になるかもしれない。しかし、そのときすでにその人物は没個性的な存在者になっているだろう。[25)]

それぞれの家庭で育てられる子どもは十人十色である。同じ家庭で育てられる子どもも各々の個性を持つ者である。ここで、子どもに対する親のコントロールが強すぎ、子どもが親の望んでいるように育てられれば、その子どもは、自分の個性を失い、単なる親の所属品になってしまうおそれがある。

また、親からの強いコントロールを受ける子どもは個人の意思や判断力を失ってしまい、親に操られる糸繰り人形のようなものになる可能性が高い。子どもの考えを無視すると、子どもが自分で判断するチャンスがなくなる。これは子どもの自主性を養うのに悪い影響をもたらす。子どもが自立できることが難しくなるのである。原野広太郎は以下のように主張する。

子どもが自立するというのは、エゴ・アイデンティティを発見し、生の主体としての自己を確立していることであり、ふつうそれは青年期になって可能なことなのであるが、それへの準備は児童期に始められなければならない。さらにいえば、どのような嬰児期・幼児期をすごしたかが、青年期の自立に大きな影響を与えるのである。親に全面的に依

存せずには生きられないこれらの発達段階で、親に甘えきることができ、親との相互信頼を体験することができた子どもは、根源的な自我をそこで誕生させることができる。そのうえで、児童期を通じて、親があたたかく見守る中で、子供は試行錯誤しつつ自己発見の努力を積み重ねて、きたるべき自立へのレディネスを獲得するのである。[26)]

子どもを自立させるために、親は子どもの個性と自主性を重視するべきである。すなわち、子どもに親からの一方的な要求に応えさせるのではなく、親の意見を聞いたり自分の主張を出したりすることを通して自主性を培うのである。

ここでは、「相談役」の概念を借りて親のあり方を述べたい。家庭教育においては親が説教するように教えるのではなく、子どもの意見にも耳を傾けることが大事である。この過程を通して、子どもは自分の意思を整理することができ、自己意識のレベルが高まっていくのである。一方で、親は子どもへの理解を深めることができる。ここにおいて親子間の信頼関係が一層進められる。

さらに、相談役は意見やアドバイスを出す役割を持つが、決定する権利を持たない者でもある。ここでは、井上肇は親に対して、「その手を放せ」と提唱する。親の子どもを守る心はけっして悪いものではないが、親が作る保護するための壁が高すぎると、子どもは籠に束入れられた鳥のようになるのではないか。親の手を放し、子どもに自分で判断、自分で選ぶ権利を戻すことが大切なのである。

子どもが迷ったり困ったりする際は、親はまず相談役として助言を出せばよいのである。親は自分の推測で子どもの意思を判断するのではなく、子どもが言い出した疑問から考えるのである。そして、決めるのは子どもだということを前提として、自分自身の経験に基づいて、役に立つ情報を子どもに提供する。その過程では、親子の中に誰かが支配者だという対立の状態ではなく、親子が

相互に尊重する姿勢が大事である。

しかし、親は当然、全て子どもに任せるのは心配である。したがって、子どもに選択する能力が身につくように、親子ともすべきことがある。このことについて、茂木喬は個性重視と道徳性育成のかかわりにおいて、「現実の重視」、「道徳的実践力」、「学校・家庭・社会三者の協力」、「体験活動」[27]を挙げている。

「現実の重視」とは、子どもや親に関する現実をもとに考えることである。例えば、個人にとって良いものはそれぞれである。牛乳は一般に栄養豊富な飲料であるが、しかし、牛乳アレルギーを持つ人にとっては毒物でもある。こうした現実を見る能力が教育の基盤であり、ここから教育は行われなければならない[28]。

こうした「現実」を踏まえたうえで、個性に応じた「道徳的実践力」を行動において発揮するべきである。個性に基づいて行動を起こす実践力が養われると、試行錯誤を積み重ねることができる[29]。間違ったり、改めたりすることを通して、子どもの自立する力が大きくなるのである。このことは、子どもの行動力を育てることに役立つ。

そして最後に、学校・家庭・社会の三者の協力を通して、体験活動に参加するべきである。人間は社会的な生き物である。子どもは様々な体験活動によって人や物事と接触し、視野を広げる。そうすることによって単一の価値観に固定されずに、開放的な見方を形成することができるのである[30]。

相談役の親が子どもに安心感を提供することによって、親子関係はますます安定することができる。また、相互に信頼できる親子関係は子どもの自主性を育てることにも役立つ。さらに、親はそばで子どもの行動を見ている間に、子どもの視点から考えたり、子どもの特別な発想に引かれたりすることもある。そうする中で、親は違う角度で今までの人生を省みることができる。このよう

にして親も成長することができるのではないだろうか。

以上、子どもが自立するようになるために、親子の間の信頼関係が重要であることを確認した。その信頼関係を作るために、親は相談役として子どもに助言を出して、子どもを支えるという姿勢を持つことが大事である。また、子どもが現実を認識する上で、積極的に実践に移して様々な体験活動を行うことが重要になることも確認された。

終わりに

親に関する問題を解決するために、「模範」、「教師」、「相談役」という三つの方面から親の役割を考察した。

「模範」としての親は、親の無意図的な行為が子どもに影響することを意識することが大事である。親の行動と発言が一致しなければ、子どもは親の言葉ではなく、親の行動から学ぶのである。そして、自信のない親も問題である。自信を確立するためには、反省することが肝心である。自分の長所や短所を確認して自分と和解することを通して自信を見出す。また、社会人として活躍できたら、親としての自信も出てくる可能性がある。「模範」としての親は、子どもにとって良いモデルとなり、子どもに良い成長の方向を見せることができる親である。

「教師」としての親については、それが知識不足の問題を解決する手がかりであること、しつけの甘さを避けるために「権威」ある親であることが重要であることを強調した。親はただやり方を教えるだけではなく、教師のように、背後の理屈も踏まえて教えることがより効果的であり、そうすれば子どもの心に残ることを確認した。また、子どもは経験を通して学ぶので、子どもに練習の機会を作り、子どもの経験を豊かにする必要性がある。そして、子どもにとって、「きびしさ」も必要なものである。子どもが真の成長に至る過程では、親

は教師のように、そばで正しく指導して、間違ったところを指摘することが大事である。

「相談役」としての親は、子どもの個性を前提として子どもの自主性を培うことを求める親の姿である。親子一体の親密な関係から次第に分離していく親子関係では、親子間の信頼を築くことが大事である。子どもを強いコントロールする親が子どもの個性や自主性を奪うことを批判して、子どもの個性を尊重する「相談役」としての親の合理性を議論した。子どもが困惑している際には、親が相談役として子どもに助言を出して、子どもを支えることが大事である。また、子どもが現実を認識する上に、積極的に実践に移して様々な体験活動を行うことが重要であることを示した。

最後に、親が「模範」、「教師」、「相談役」になる過程では、親はただ子どもに影響をもたらすのみならず、親自身も成長できるのである。子どもの姿を観察している際は、親は自分の過去の人生を振り返ることもある。そのことを通して親は自分の人生を反省できる。また、子どもの出現によって、親の人生も新しい段階になり、新しい体験ができるようになる。家庭教育においては、親子ともに成長すると筆者は考える。

註

1）井上肇『子育て親育て』山陽新聞社、1986 年、p. 57

2）原野広太郎『家庭のしつけと学校のきまり』金子書房、1987 年、p. 64

3）前掲書、p. 105

4）前掲書、p. 105

5）張光泽「“5+2=0”家庭教育の弊害の現象分析」、问题研究· 教育理论研究、2019 年、p. 212

6）原野広太郎『家庭のしつけと学校のきまり』金子書房、1987 年、p. 109

7）前掲書、p. 109

8）前掲書、p. 110

9）前掲書、p. 110

10）上寺久雄『親よ・親であれ』黎明書房、1971 年、p. 55

11）井上肇『子育て親育て』山陽新聞社、1986 年、p. 20

12）原野広太郎『家庭のしつけと学校のきまり』金子書房、1987 年、p. 48

13）青木誠四郎「新しい教育と家庭教育」『戦後家庭教育文献叢書第 2 巻』、クレス出版社、1996 年、pp. 113-123

14）前掲書、pp. 113-115

15）前掲書、pp. 115-117

16）前掲書、pp. 117-123

17）前掲書、p. 125

18）前掲書、p. 126

19）井上肇『子育て親育て』山陽新聞社、1986 年、p. 24

20）原野広太郎『家庭のしつけと学校のきまり』金子書房、1987 年、p. 102

21）上寺久雄『親よ・親であれ』黎明書房、1971 年、p. 194

22）前掲書、p. 158

23）前掲書、p. 159

24）井上肇『子育て親育て』山陽新聞社、1986 年、p. 9

25）原野広太郎『家庭のしつけと学校のきまり』金子書房、1987 年、pp. 25-26

26）前掲書、1987 年、p. 53

27）茂木喬「個性重視の原則と道徳性の育成とのかかわりについて」、千葉敬愛短期大学紀要（28)、2006 年、pp. 33-34

28）前掲書、p. 33

29）前掲書、p. 33

30）前掲書、p. 33

The ethical role of parents in child discipline
-by comparing Japanese and Chinese views on moral education

Zhao Yue

Graduate School of Letter　(Master's degree program),

Hiroshima University

Moral, intellectual, and physical education are very important for the growth of children. These are indispensable elements of education. However, with time, the proportion of school education has also changed. This thesis is based on moral education, and focuses on today's concept of child discipline, which is the root cause of adolescent problems.

Keywords：ethical issues, family education